



市民図書館の
司書が調べます

まちで見つけた

「なんでだろ〜?!」

複製版

8月16日に開かれる夏祭りを「しゃんしゃん祭」っていうの、なんでだろ〜?

「鳥取しゃんしゃん祭」がスタートしたのは昭和40(1965)年8月16日のことです。市民がそろって楽しめる新しい祭りを、という当時の市長・高田勇氏の発案で誕生しました。名付け親は山脇豪(行徳)、藤井恒夫(南町)の両氏。その年の3月、公募された46点の名称の中から選ばれました。由来について、市の商工観光部長だった久林肇氏は著書『しゃんしゃん祭物語』(平成9年)の中で、「シャンシャンという鈴の音と、市街地の温泉で沸く湯がシャンシャンと鳴る音から「しゃんしゃん」が取られた」と紹介しておられます。

山脇・藤井両氏とも故人なので直接お話を伺うことができませんでしたが、「温泉で沸く湯がシャンシャンと鳴る音」という命名の背景には「きなんせ節」が影響していたのではないのでしょうか。

「街に温泉がシャンシャン沸いて」という歌詞で知られる「きなんせ節」は、昭和26年(1951)に発表されています。作詞者は「貝殻節」の作者としても有名な松本榊葉子(本名・儀範)氏です。氏の著書『ふるさとの民謡』

(昭和43年、鳥取郷土文化研究会・発行)には「キナンセ節生立ちの記」として数々のエピソードが綴られています。「きなんせ節」はもともと「鳥取新温泉小唄」として企画され、観光客の旅情を慰めるため鳥取駅のホームで列車の停車中に流されていたのが、婦人会のレクリエーションなどを通じて市民の間に広まっていったのだそうです。また、「しゃんしゃん祭」が始まる前年の9月には、市庁舎の完成を祝う落成式において、「きなんせ節」に振り付けられた新たな傘踊りも披露されています。伝統芸能である「因幡の傘踊り」を誰でも踊れるようにと、横枕の高山柳蔵氏がアレンジしたものでした。「しゃんしゃん祭」の名付け親である山脇、藤井両氏の脳裏にも、軽やかな鈴の音とともに「きなんせ節」の一節がこだましていたのではないのでしょうか。

ちなみに、国語辞典で「しゃんしゃん」という言葉を引くと、「①鈴などの鳴る音」「②湯が盛んに沸き立つさま」という意味とともに、「③元気に立ち働くさま」という解釈も見られます。鳥取の夏を彩る風物詩として市民の暮らしの一部になっている「鳥取しゃんしゃん祭」。今年も市民そろって「しゃんしゃん」と、元気に楽しみたいですね。(とっとり市報2003.8.1号より)